

〈在日朝鮮人〉の民俗誌

Ethnography of "Koreans in Japan"

島村恭則

はじめに

- ① ビジン・クレオール語
- ② モーニング
- ③ チェンシネビ
- ④ 〈日本人〉との関係
- ⑤ ビジン・クレオールとしてのホージ
- ⑥ 家紋の創出
- ⑦ サパークラブ

結び

【論文要旨】

これまでの民俗学において、〈在日朝鮮人〉についての調査研究が行なわれたことは皆無であった。この要因は、民俗学（日本民俗学）が、その研究対象を、少なくとも日本列島上をフィールドとする場合には〈日本国民〉〈日本人〉であるとして、その自明性を疑わなかったところにある。そして、その背景には、日本民俗学が、国民国家イデオロギーと密接な関係を持っていたという経緯が存在していると考えられる。

しかし、近代国民国家形成と関わる日本民俗学のイデオロギー性が明らかにされ、また批判されている今日、民俗学がその対象を〈日本国民〉〈日本人〉に限定し、それ以外の、〈在日朝鮮人〉をはじめとするさまざまな人々を研究対象から除外する論理的な根拠は存在しない。

本稿では、このことを前提とした上で、民俗学の立場から、〈在日朝鮮人〉の生活文化について、これまで他の学問分野においても扱われることの少なかった事象を中心に、民俗誌的記述を試みた。

ここで検討した生活文化は、いずれも現代日本社会におけるビジン・クレオール文化として展開されてきたものであり、また〈在日朝鮮人〉が日本社会で生活してゆくための工夫が随所に凝らされたものとなっていた。この場合、その工夫とは、マイノリティにおける「生きていく方法」「生存の技法」というものである。

さらにまた、ここで記述した生活文化は、マジョリティとしての国民文化との関係性を有しながらも、それに完全に同化しているわけではなく、相対的な自律性をもって展開され、かつ日本列島上に確実に根をおろしたものとなっていた。

本稿は、多文化主義による民俗学研究の必要性を、こうした具体的生活文化の記述を通して主張しようとしたものである。

キーワード：在日朝鮮人、多文化主義民俗学、ビジン・クレオール文化、〈在日〉社会の共同性、生きていく方法